

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

携帯メールにおける日・韓コードスイッチング現象について

李宥定

本研究は、韓国人留学生から得た携帯メールの文字言語データを通じ、携帯メールにおける日・韓コードスイッチング現象について調査分析したものである。これまでの二言語間コードスイッチング研究では、スイッチを呼び起こす要因について言語能力、親疎関係、コンテキストなどが挙げられてきたが、携帯を利用したメール言語では新たに媒体機器の持つ機能的制限が考えられる。つまり、媒体機器のもつ機能的制限が日・韓コードスイッチングを発生しやすくも、あるいは発生しにくくもする。これは「ガラケー」と「スマホ」での日・韓コードスイッチングの実例をもって行った対照より発見された形態的な特徴(韓国語、日本語、カタカナ韓国語の三通りの表記法)、スイッチの条件(既に設定されていた文字入力法に従う)、日・韓コードスイッチングの主なパターン(日本語ベース-文間のCS、韓国語ベース-文内のCS)から証明できると思われる。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

関西在住大学生のボケとツッコミに対する意識調査

VAAGE GORAN

関西方言には「ボケ」「ツッコミ」「オチ」のような語用論的な構成要素、およびそれらに伴う「なんでやねん」などの言い回しを方言に包含することができると考えられる。本研究の目標は関西スタイル会話の語用論的な構成要素は何かを明確にすることおよび関西在住の人はこれらの構成要素に対するどのような意識を持っているかを明らかにすることである。

意識を測るために現在関西の大学で勉強している 280 人に協力をいただきアンケート調査を実施した。関西出身の人は非関西出身に比べてボケもしくはツッコミを言う頻度が高く、目上の人やパワーが高い人に対してツッコミを言う抵抗が少ないことが明らかになった。私立女子大学において「ボケ・ツッコミ」あるいは「お笑い」の重要度がもっとも高いという結果を得た。これは、女子大学のような学生生活環境において、学生同士で円滑なコミュニケーションを取ることが優先される行為であるからと考えられる。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

**【F棟 1F アトリウム】**

フォローアップ・インタビューにおける質問発話の仕方と  
内容についての一考察

—2つのインタビューを比較して—

赤木美香 山口紀子 柏楊 中井陽子

本研究は、フォローアップ・インタビュー (FUI) において、インタビュー実施者がインタビュー対象者の応答を引き出すにはどのような質問発話が適切なのかを明らかにすることを目的とした。まず、2つの FUI のデータを見ながら3名による印象度の尺度評定を行った。次に、評定値の高い FUI と低い FUI における質問発話を抽出した。さらに、インタビュー対象者に対し、1度目の FUI についての2度目の FUI を行い、対象者にとって答えやすい質問発話であったかどうかを確認し、効果的な質問発話を特定した。その結果、効果的な質問発話とは、①言語面、非言語面に対して、対象者が想定できうる具体的な質問であること、②インタビューの前に十分なウォームアップを行い、インタビュー途中でも逆質問ができるような雰囲気をつくること、③対象者の情意レベルをコントロールできるような環境作りを心がけることが必要であることが示唆された。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

メールにおける日本語学習者の「ません」と「ないです」

稲吉真子 岡崎渉 蘇振軍 谷口愛保 永田良太

上級日本語学習者がメールにおいて、丁寧体否定形である「ません」と「ないです」をどのように使い分けているのかを調査した。「先生」「先輩」に送るメールの文面を作成し、日本語母語話者及び上級日本語学習者に、文末の各品詞直後に設けた空欄に記述してもらった。その結果、日本語母語話者は「先生」に対してほぼ「ません」のみを用いていたが、学習者は「先生」に対しても、特に形容詞で「ないです」を多用していた。日本語の初級教科書における形容詞はほぼ「ないです」形のみが扱われていること、母語話者は会話において「ないです」を優位に使用していることから、学習者には形容詞の「ません」形自体が使用の候補として想定されていない可能性が考えられる。だが、母語話者の場合、「先生」へのメールでは「ないです」の使用が控えられていたことから、日本語教育においては、形容詞であっても「ません」形を提示していく必要があると考える。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

広告表現における文脈についての一考察

呂晶

本発表は、いわゆるキャッチコピーを対象に、広告表現の解釈に深く関わる要素—文脈—を整理するものである。広告というと、一般的には、その広告表現を見るだけで広告の意味がよくわからないものが多いだろう。特に商業広告の場合では、広告表現自体の意味がわかるとしても、それはあからさまに商品の情報を伝えるものであるというわけではない。それゆえに、受信者が広告表現から商品の情報を引き出すためには、文脈に依存するほかないと思われる。本発表は、先行研究の議論をまとめた上で、広告表現における文脈とは何か、またどのような特徴があるかという問題について考察する。具体的に述べれば、広告における文脈として、形式文脈、状況文脈、知識文脈、附加文脈のほか、パラ文脈、メタ文脈と架空の文脈が挙げられる。それぞれの文脈は、一定の特性を有すると考えている。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

就労支援のカウンセリングにおける「自己卑下」の展開

岩田夏穂

自己卑下は、早い段階で否定するのが優先的応答であることが指摘されている (Pomerantz 1984)が、カウンセリングでは、異なる展開を見せることがある。本発表は、若者の就労を支援する組織の支援者とその利用者による対面 2 者間の会話を、会話分析 (conversation analysis) の手法を用いて分析し、カウンセリングにおける自己卑下の連鎖組織 (利用者の自己卑下と支援者の受け止め、およびその後の展開) の特徴を明らかにすることを目的とする。データから、支援者は、本来なら自己卑下を否定する位置で、利用者に自己卑下の根拠を求める現象が観察された。考察として、カウンセリング場面における利用者の自己卑下が、支援者とのやり取りを通して就労支援の有効なリソースとなっている可能性があることを指摘する。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

国会における看護師・介護福祉士候補者受け入れに関する議論の分析

—日本語教育の観点から—

布尾勝一郎

2008年、経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者（以下、「候補者」）の受け入れが始まった。候補者らが日本で就労し続けるには日本語での国家試験合格が条件となることなどから、当初から「日本語学習」「日本語能力」が焦点の一つとなっており、様々な制度上の問題点が指摘されている。本発表では、国会会議録検索システムのデータを使用して、候補者の受け入れに関する国会での議論を分析した結果を報告する。制度構築には在留資格や就労の条件など様々な側面があるが、とりわけ、候補者に対する日本語教育や候補者の日本語学習がどのように議論され、言語教育政策につながっているかに焦点を当て、国会での議論の特徴や問題点を明らかにする。国会が、関連省庁ですでに決まったことについて議員が質問し、結果として追認する場となっている点や、言語教育についての実質的な議論が行われていない、などの問題点を指摘する。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

「コネチカットね」

—助詞「ね」が付与された他者発話の部分的繰り返しにみられる相互行為秩序—  
横森大輔 安井永子 初鹿野阿れ 勝田順子 市村葉子 古田朋子

本研究は、会話分析の立場から、助詞「ね」が付与された他者発話の部分的繰り返し（「繰り返し+『ね』」）というフォーマットの発話が会話の中のどのような位置で用いられ、どのような働きをしているのか、会話分析の手法を用いて明らかにする。分析から、このフォーマットの発話が用いられるパターンとして「提案に対する応答の前置き」および「説明に対する反応トークン」という2つのタイプが存在することが確認された。「繰り返し+『ね』」は、直前の提案や説明の中で挙げられた特定のアイテムを取り上げ、それを既に知っていた、或いは、検討済みであった、という認識的主張を行う働きがあることが示唆された。本研究では、助詞「ね」のように日本語に特異な言語資源が提供する日本語会話に固有の相互行為プラクティスを検討することにより、特定の言語の会話における個別的特徴に会話分析の立場からアプローチする研究の方向性を示す。



<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

国内の日本語教育における非日本語母語話者教師の存在についての考察  
—日本国内の大学で日本語教育に携わる日本語非母語話者教師へのインタビューより—  
高橋雅子

多文化共生や日本語教育の多様化に注目が集まっているにもかかわらず、日本国内における日本語教育現場では、日本語非母語話者教師（NNT）はまだ「珍しい」存在と見られがちである。本研究では日本国内の大学で日本語教育に携わるNNTに半構造化インタビューを行った。その結果、調査協力者は自身がNNTであることに気負いがなく、「個人の専門性や人間性で教師としての力量が決まる」という考えを持っていた。また、自身が担当した学習者からはNNTだからといって特別な反応はなかったという。今後、時代の流れとともに国内の日本語教育の現場でもNNTは珍しい存在ではなくなるであろう。NNTとNTが国籍や母語が異なることは事実であるが、一個人として特徴を持った教師としていかに教育現場に関われるかが今後の日本語教育で考えていくべき課題の一つであると言えるのではないか。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

移民児童による親世代の日本語接触変種の使用は侮蔑的なのか  
—お父さんの言うこと「聞てない聞てない」他1例より—  
山下里香

日本に育つ移民の子どもたちは、親の話す日本語以外の言語（継承語）が十分に理解できなかつたり、話せなかつたりするために、親子間のコミュニケーションに障害が起こることがあると言われる。また、親の話す「間違った」日本語を、恥ずかしいと思つたり、小馬鹿にしたりするという話も、子どもたちの母語支援に関する言説において見られる。

本発表では、小中学生の児童が、移民コミュニティ内の成人の「間違った」日本語（以下「日本語接触変種」）を、関東首都圏のとある移民コミュニティ教室のやりとりにおいて使用した例を挙げる。本発表では、児童が教師の立場をとつて他の児童に対して日本語接触変種を使用する例を、自然談話の録音からの切片2例挙げ、詳細に分析する。その結果、これらの例では、日本語接触変種がコミュニティ内の成人の権力を指標しており、必ずしも侮蔑的な意味で使用されているわけではないということを主張する。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

**【F棟 1F アトリウム】**

海外における日本語・日本文化の継承はアイデンティティとどう関わるか  
—国際結婚女性の過去と現在—

三宅和子

近年のグローバル化とデジタル・メディア技術の急速な進展に伴い、時空間の距離が短縮している。さまざまな契機で海外に渡り、永住する日本語話者も増加している。流動する社会の中で国や文化を越境し海外に居住する日本語話者を、早期「日系移民」とは区別して日系ディアスポラと名づける。

本発表では、イギリスで国際結婚をした日本人女性に焦点を当て、1960年～70年代に海を渡った高齢世代と、子育て世代へのインタビュー調査を通して、かけ離れた言語社会で日本語と日本文化の保持と継承がどのように願われ実現されてきたかを、時代背景と環境、自己アイデンティティとの関連で考察する。

<<ポスター発表>> (9月14日 10:30-11:45)

【F棟 1F アトリウム】

インタビュー場面における聞き手の理解の表示  
—話し手の自己開始修復連鎖における聞き手の反応に注目して—  
山本真理 柳町智治

本研究は、インタビュー場面における話し手の説明中に見られる、聞き手の「うん」「はい」「ええ」といった短いトークンとその使い分けに関する研究である。これまで多くの研究や日本語教育用の解説書において「うん」と「はい」の使い分けは「丁寧さ」の問題として理解されてきた(Maynard 1990 等)。一方、富樫(2002)は「「はい」「うん」の本質が丁寧さというファクターを用いて記述すべきものではない」(p.128)ことを指摘する。本発表でも同様に、丁寧さとは異なる要因によってこうしたトークンが使い分けられていると考える。具体的には、話し手の長い説明の過程で、自己開始修復が行われる際、その聞き手の反応が「うん」から「はい」のように切り替わる現象に注目する。そうした変化によって、聞き手は、今ここで話し手によって「特別に聞き手の反応を要求する」行為が行われたことを理解していることを示していると考えられる。